

二〇二一年度

## 帰国生入試 問題（国語）

### 注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから一九ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくい場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

職員室で鍵を受け取り、プールに向かう。更衣室で着替え、プールサイドに出てくると、先ほど脳内に浮かんだのと同じ水面が広がっている。

何かに負けそうになるが、ぐっと堪えて辺りを見回す。すると屋根付きのベンチにギターケースが置かれている。十太はアンプを運ぶ途中だった。

あの日、十太が水の中へ飛び込んできた日以来、自主練のプールの定員が一人から二人に増えた。でもそれ以外に変わったことはなかった。夏佳はいつも通りの練習を今日も繰り返そうとしている。

「……やつほ」

ぎこちなく手を振ると、「おう」と頷きが返ってくる。それ以上、何か会話が続くこともない。夏佳は飛び込み台の方へ向かい、軽く準備運動を始める。

夏佳には大会が迫っていた。この地方の水泳連盟によるジュニア大会が今週末に開かれるのだ。中学生が出られるものとしては大きい部類に入った。実のところ、夏佳は大会が少し苦手だ。どうしても緊張してしまい、実力を出し切れたことから思えるような泳ぎを中々できないのだ。

その緊張をどう扱っていいかわからないまま、今日も泳ぎを繰り返す。

夏佳が練習を始めると、十太もギターを弾き始めた。十太は定期的に新たな譜面を持ち込み、違う曲を習得しているようだった。夏佳はその演奏をBGMにしながら泳いでいく。

互いがそれぞれ集中し、自分の練習をする。本当にそれだけの時間だ。

やがて、十太があるフレーズを弾き始めた。お気に入りの曲なのか、十太は練習のたびにこれを弾いていた。耳残りのいい、どこか切ない音のまとまり。

夏佳が泳ぎに集中すると、特定の何かを考えるのは難しくなる。意識が体に向くことで、頭の中が空白地帯になっている。そこへ臍げに流れ込むのがこのフレーズだった。夏佳はそれを聞くでもなく、ただただ薄らと感じている。透明な夢を見

るような心地。

十太は同じフレーズを何度も繰り返す。そこに迷いはないように思える。夏佳は音に耽溺する十太が羨ましかった。十太は何かを強く信じていて、そこに疑問などないのだろう。

練習に一段落をつけ、プールから上がる。すると、ベンチにいる十太は演奏を止めて手元を凝視している。どうしたのかと思っただけ、十太はギターを肩から提げたまま、手元にラジオを持っていた。だが、そこから鳴るのはノイズだけだ。

「それ、どうしたの？」

「ラジオ」

「それは見れば分かるけど」

夏佳はかくりと肩を落とす。そういうことじゃない。

「何でラジオなんて持ってきたの？ しかも周波数合っていないし」

「……最近、この周波数の辺りで変な電波を拾うんだ」

「変な電波？」

夏佳は首を傾げた。十太はラジオに視線を落として話し続ける。

「FMラジオなんだけど、喋りも広告もなしで、ひたすら音楽が流れてるだけ。そんな放送が数時間続いている」

「な、何それ」

ラジオに疎い夏佳に詳細は分からないが、確かに妙な番組だ。ノイズを垂れ流すラジオに思わず目をやる。十太も同じところを見つめている。

「……でも、どれもいい曲なんだ。細かく色んな音が入っていて、新しい。どれもすごくセンスがいい」

その言葉は静かに興奮を帯びている。どうしたらこんな風に夢中になれるんだっけ。

「電波が入ったら聴かせてあげるよ」

十太と目が合う。夏佳は何故か物悲しくなって呟く。

「楽しそうだね」

自分の冷たい声に驚き、すぐに後悔した。こんな口調で話すつもりはなかった。十太が何かを汲み取ったのか、少しだけ視線を彷徨わせると、また夏佳に目を合わせる。

「夏佳は水泳、楽しい？」

十太はこちらを向いていたのに、まるで海を眺めているような遠い目をしていて、楽しいよ。

そう口にしようとして言葉に詰まる。浅い呼吸に呑み込まれる。

何か言わなければいけないのに何も言えない。楽しいと言うだけでいいのに。

グラウンドから跳ねるような声が聞こえた。フェンス越しに目をやると、野球部員の男子が陸上部員の女子にホースの水でちょっかいを掛けていた。グラウンドの水撒きに乗じて四、五人がはしゃいでいる。

プールサイドの視線に気付き、陸上部の女子の一人がこちらへ手を振った。秋穂<sup>5</sup>だった。

楽しそう。

また冷めた感情が湧く。そんな自分に驚き、慌てて手を振り返す。秋穂は夏佳の反応に満足したのか、こちらへ背を向けて野球部の男子を追い駆ける。

「……楽しいとか、分かんないよ」

気付けばそんなことを口にしていて。

「私は楽しいから泳いでいるんじゃない。オリンピック中継で観た選手に憧れたの。あんな風に泳ぎたいから、あんな場所<sup>6</sup>で泳ぎたいから、今も泳いでる」

夏佳にとって、将来は今と地続きだった。どうしても辿り着きたい未来があって、それに向かって藻掻かなければいけない。そう思い続けて今日まで泳いできた。

「私が泳いでいる間に、みんなは友達とじゃれて、はしゃいで、笑ってる。でも私はそういうやり方が分かんないんだよ。憧れを叶えるために、泳ぐことしかできない。……いや、憧れを叶えるためなのかすら、あんまり分かってない」

あのオリンピック選手<sup>6</sup>の姿をいつでも容易く思い出せる。水と溶け合うようにしてぐんぐんと泳ぎ進める彼女がいつまでも脳裏にいる。でも、彼女のようにには全然泳げない。その姿はあまりに遠い。

水泳に打ち込めば打ち込むほど、クラスメイトとの距離は離れていく。けれど、脳裏で泳ぐ選手にもまるで追いつけない。それなのにどうして泳いでいるんだらう。自分で望んで泳いでいるはずなのに、惨めさが拭えない。

<sup>6</sup> 思考が渦を巻きながら沈んでいく。夏佳が俯いたとき、十太が口を開いた。

「海は好き？」

「え？」

十太はフェンスに手を掛け、遠くを眺めている。高台の下に広がる小さな町。真っ青な空と、さらに青い海。薄く広くどこまでも漂う潮の匂い。引越してきて一年数か月、未だに鼻がつんとする。

「……あんまり好きじゃない。泳ぐと肌が痛いし、しょっぱい。潮風も何だか慣れない」

正直に答えた。

「そっか」

十太は夏佳の答えには興味がないように見える。何で突然そんなことを聞いたんだらうと首を傾げていると、十太が呟く。

「俺、波が好き」

「波？」

「うん。波は何度も打ち寄せる。それが好き」

十太はフェンスから離れ、ベンチに腰掛ける。ギターを構え、先ほどのフレーズをまた弾く。

「このギター、父さんからもらった」と、艶やかな赤いボディを撫でる。「ギターを弾く父さん、格好良かった。新しいコードが弾けるようになると、左手でよく撫でてくれた。弦の押さえ過ぎでカチカチになってた」

コードを弾く。六弦の連なりがどこか切なく響く。

「ずっと父さんに憧れてた」

十太は目を細めた。やけに愛おしそうな表情と、すべてが過去形の十太の話に、夏佳は嫌な予感がした。

「お父さん、何かあったの？」

「死んじゃった」

十太は遠くを見ながら呟いた。

夏佳は何も言えない。言える訳がない。いつも遠い目をした十太が何を見ているのか、その片鱗が少しだけ分かった。

「大切な事は繰り返さなきゃ。何度も、何度でも。忘れてしまわないように、負けてしまわないように、ちゃんと貫けるように」

何度も、何度でも。

8 その言葉に胸が詰まった。自分がどこかで呟いていた言葉だった。視界の奥、遠くの海には確かに白波が立っている。波の音が聞こえてくるような気がする。

また十太がギターを弾き始める。言葉にならない感情を零れるほど抱えて、音が夏佳へ打ち寄せる。

週末、大会当日を迎えた。

大会会場は、家のある町から車で二時間の場所だった。百万都市の都心部から少し離れたところに位置する水泳競技場で、企業名を冠した巨大なスポーツ施設群の一角にある。

朝八時過ぎには両親の車で会場に着き、開会式やウォーミングアップを済ませていた。観客席の二階に、所属するスイミングスクールの生徒や保護者、コーチが集まっている。夏佳と両親もその辺りに腰を下ろし、自分が出場する二百メートル平泳ぎのレースを待つ。

大会の緊張感に焦れながら、レースを見るともなく眺める。自分もあの場で結果を残さなければいけない。これまで何度も泳いだのに、レースは一発勝負。そんなの不条理じゃないか。分かり切ったことを内心で呟き、溜息を小さく溢す。

レースの三十分前になり、コーチが夏佳の名前を呼んだ。

観客席を出て一階に降りる。更衣室に入ると同世代の選手たちが黙々と着替えている。誰かと目が合うことはない。夏佳も目を床の青いすのこに向け、人の視線を避ける。空いているロッカーを見つけると、手早く荷物を入れる。アップしたと

きに着替えは済んでいるから、後は羽織っていたジャージを脱ぐだけでよかった。

シャワーを浴びて、プールへ出る。

高い天井が頭上に広がっている。人工物の金属的な空気に加えて、プールから塩素の匂いがある。喉元に苦い水がせり上がる。大会特有のこの雰囲気は苦手だった。

鼓動が痛いほど高鳴る。プールのサイドの待機列で、夏佳はぎゅっと目を閉じる。そのとき、十太の弾いていたフレーズが頭を過った。

何度も、何度でも、十太はフレーズを繰り返す。初めは指がもたついてたけれど、次第に動きが慣れてくる。やがてプールサイドから美しい音の流れが響いていく。清廉な切なさを帯びた音が、夏佳の脳内で容易く再生される。

十太は父に憧れたと言った。でもその憧れはいつまでも叶わないように思えた。傍からどう見えたとしても、十太の中では父を越えられない。

夏佳も同じだ。どれだけ泳いでも、脳裏にあるあのオリンピック中継で観た選手の姿を越えられない。ただ、ただ。何度も、何度でも、夏佳と十太は繰り返してきたのだ。

忘れてしまわないように、負けてしまわないように、ちゃんと貫けるように。叶う叶わないの次元を超えて、ただ遠くを見続けている。

夏佳のレースの番になった。他の選手とともに、飛び込み台へ一列に並ぶ。いつもなら周りの選手を見回してびくびくしているだろう。でも、今の夏佳は何も恐れていない。気付けば、胸の苦しさはどこかへ消えていた。

学校のプールを思い出す。フェンス越し、遠く水平線に広がる海。海を眺める十太の目はいつも遠い。ああやって遠くを見つめていればいい。

憧れを追い、いつまでも途上にいる。憧れに生かされている。

ブザーが鳴り、夏佳はプールへと飛び込んだ。

脳裏にまたあのフレーズが流れ始める。全身に意識が分散し、透明な気持ちで夏佳を包む。そこに、ずっと抱えていた孤独感は見当たらない。十太がプールに飛び込んできたあの日から、夏佳はもう一人じゃなかった。

〔設問〕

問一 —— 線部 1 「それ以上、何か会話が続くこともない」とあるが、なぜか。その理由を説明した次の文の空らん当てはまる言葉を、本文中から一五字以上、二〇字以内でぬき出しなさい。

「

」ためにプールに来ているから。

問二 —— 線部 2 「十太が羨ましかった」とあるが、夏佳がそう思うのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 水泳を続けるべきかやめるべきか迷っている自分とは違って、十太は自分を信じて迷うことなく音楽の道を進んでいくように感じられたから。

イ どんなに努力しても憧れの水泳選手のようにはなれない自分とは違って、十太には才能があつて音楽に愛されているように感じられたから。

ウ 水泳の練習をする際に信じられるお手本がない自分とは違って、十太には音楽に取り組む際に信じられるものがあるように感じられたから。

エ 何のために泳いでいるのか分からなくなっている自分とは違って、十太は何の疑問もなく音楽に夢中になっているように感じられたから。

問三 —— 線部 3 「夏佳はかくりと肩を落とす」とあるが、なぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十太が自分の聞きたかったことに答えてくれず、質問の意図が伝わっていないと感じたから。

イ 十太が自分のしたい話を続けてばかりで、夏佳の話を聞こうとしていないように感じたから。

ウ 十太がわざと的外れな答えを返してきて、二人の会話がうまくかみあわないように感じたから。

エ 十太が状況じじょうきょうをくわしく説明してくれず、心配して声をかけなければよかったと感じたから。

問四 —— 線部 4 「どうしたらこんな風に夢中になれるんだっけ」とあるが、夏佳がそう思うのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十太にとつてのラジオや音楽のような、水泳に代わって夢中になれる新しい世界が、自分にはまだ見つからないから。

イ 十太が音楽に熱中しているように、かつては自分も水泳に対して夢中になっていたはずなのに、今はそうできないから。

ウ 十太が妙なラジオ放送という、自分にとつてはつまらなく思えるようなことに夢中になっているのが理解できないから。

エ 十太のように何かに夢中になれる無邪気むじゃぎさを自分はなくしてしまっており、相手の熱意にかえって冷めてしまったから。

問五 —— 線部 5 「秋穂だった」とあるが、「冷めた感情が湧」いている今の「夏佳」と比べた時に、ここでの「秋穂」はどのような人物として描かれていると言えるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰とでも仲良くできるが、友人の感情には気づかないような鈍感どんかんな人物。

イ 今の生活を全力で楽しんでおり、思いやんだりすることがなさそうな人物。

ウ 物事を深く考えることがなく、その場の雰囲気に合わせて行動する人物。

エ 陽気で親しみやすい性格である一方、友人を気づかう一面もある人物。

問六 —— 線部 6 「思考が渦を巻きながら沈んでいく」とあるが、この時の夏佳の気持ちはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 水泳に楽しく取り組んできたはずなのに、十太が音楽を楽しむように自分は水泳を楽しむことができず、そのせいで憧れの選手のようになれないのだと思っっている。

イ 自分のたどり着きたい未来のために、自分から望んで泳いでいたはずなのに、憧れの選手に追いつく見込みもないまま泳ぎ続けるのが自分の望みだと言えなくなっている。

ウ なやみを抱えながらもこれまで泳ぎ続けてきたのに、どんなに努力を続けても憧れの選手に追いつくことはできず、自分が何のために泳いでいるのか分からなくなっている。

エ クラスメイトと仲良くしたいと思いがちながらも、あえて距離をとって水泳に打ち込んできたのに、どんなに努力しても憧れの選手のようにはなれないのだと気がつき始めている。

問七 —— 線部 7 「いつも遠い目をした十太が何を見ているのか、その片鱗が少しだけ分かった」とあるが、この時夏佳が「少しだけ分かった」のはどのようなことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十太は夏佳の想像がおよばないような理想をもっているのだからということ。

イ 十太が目指している境地は並の努力ではたどり着けないのだからということ。

ウ 十太は永遠に勝てるはずのない相手に勝とうとしているのだからということ。

エ 十太はどうしても手の届かないものに憧れを抱いているのだからということ。

問八 —— 線部 8 「その言葉に胸が詰まった」とあるが、なぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十太が呟いた「大切な事は繰り返し返さなきゃ。何度も、何度も」という言葉が、繰り返し演奏されるギターのフレーズと重なって感じられたから。

イ 十太の父親が亡くなってしまっていたことを知って、いつも遠い目をしている十太の胸のうちを思うと気の毒でたまらなくなってきたから。

ウ 「大切な事は何度も繰り返し返さなければならぬ」という言葉になつていなかった自分の思いが、十太の言葉によって明確なものになったから。

エ かつて自分がどこかで発した「何度も、何度も」という言葉に込めていた思いが、間違っていないか確認することができたから。

問九 —— 線部 9 「喉元に苦い水がせり上がる」とあるが、この時の夏佳の気持ちはどのようなものか。次の中から適当なもの一つを選び、記号で答えなさい。

ア 納得のいく泳ぎができるか不安でたまらず、気持ちが張り詰めている。

イ 十太の言葉の真意が理解できず困惑して、心の整理ができないでいる。

ウ 泳ぐことへの迷いで胸がつかえてしまい、逃げ出したいと思っている。

エ つらく苦しい記憶しかないプールの匂いが不快で、冷静さを失っている。

問十 —— 線部 10 「十太がプールに飛び込んできたあの日から、夏佳はもう一人じゃなかった」とあるが、十太と出会ったことで、夏佳は泳ぐことに対してどのように思うようになったか。夏佳が十太のどんな姿に影響を受けたのかを明確にしなすながら、八〇字以上、一〇〇字以内で答えなさい。ただし、次の言葉を必ず使うこと。 憧れ

## 二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

コロナ感染の発生以来、世界中の国境は閉鎖され、難民たちの動きがいつそうキビしくなる一方、人々を隔てさせる実際の壁も柵もしばらく建設が止められているらしい。代わりに言葉の壁が各地で積み上げられようとしています。

残念なことに、日本語でも見られることです。二〇二〇年の春から、日本が重症者や死者の数を欧米先進国と比べ、桁違いに少なく抑え続けていることは様々な意味で注目すべく、評価すべき達成で、その達成の要因を検証し共有してこそ、今後感染拡大に苦しむであろう世界各地の人々に連帯の証しとして、あるいは疫学の実践においても歓迎されるに違いありません。

ところがそういった達成を日本の政治家は「民度」の違いという一言に集約してみせました。「民度」とは、一八七〇年代の終わりから現れ、和製漢語と考えられる言葉です。二〇世紀初頭から「タミノチカラのホドアヒ」(『新編漢語辞林』一九〇四年、青木嵩山堂刊)、「人民の分野又は貧富の度合」(『辞林』一九〇七年、三省堂刊)という具合に、日本語辞書に載録されます。以来、終戦にいたるまでは、アジア諸地域の経済状況や文化的に低い「度合い」を考慮しながら、日本の教育と法整備を適合させ、導入すべきだという文脈で使われることが多かったのです。また戦後でも、やはり自国と異なる人々を能力の劣る下位に置くことで、自らが高みにあることを表現する差別的な文脈で使われることが度々見受けられます。おそれずに述べると、長い間、社会の中でくすぶり、幽霊のように死にきれない「民度」という一語は、今回も事象をタカクテキに検証しないといけないのに、曖昧な上に相手を疎外する言葉の「越えられない壁」として出現したのです。その背景には、分裂を煽ってはばからない、ここ数年間の世界的な傾向が働いているように思えます。強さを強調するつもりが、かえって「向こう」にいる人々の不信を買ひ、損失を招きかねない例として考えるべきでしょう。

ウイルスの感染に肌の色や性別や人種、お金の有無の区別はありません。どんな背景を持つ人でも、みな新型コロナウイルスには感染する可能性があるのです。「弱さ」は人間共通であり、力の度合いを誇り合うのではなく、この「平等な弱さ」から我々は何を引き出すことができるのかを考えることが求められています。

私事になりますが、在宅勤務が続くことで、不便や不安なことも色々ありますが、良い方向に向かおうとする変化も感じられました。家という限られた空間に長くいると、一緒にいる人や生き物、植物も含めて、これまで以上に向き合わざるを得ないというか、向き合う機会になります。そうすると、たとえば一日の中でもいろんな感情のトーンがありますが、これまでとは違うものが表れます。ふだんどんな進む作業をもどかしく思ったり、急に怒りっぽくなったりすることもあれば、一方で、なんでもないときに、パソコンを叩いているパートナーを後ろから見てもなく感動したりすることがあったり。すべての人に共通している「弱さ」、街を歩きながらそんなことを思うと、淡々と自分や自分の家族を守ろうとしているおぜいの通行人がいとおしく感じられるような不思議な瞬間がありました。

新型コロナウイルスに対抗するためには協力や連帯が不可欠です。人が動きやすい、協働しやすい仕組みを社会の中でどう作り、根付かせるのか。そうした問いに応える行動を、今回の危機から見いだしたいと個人的には思います。

わたくしが館長を務めている国文学研究資料館(国文研)は、全国の大学共同利用機関として大規模なデータの集積、整備、発信をしています。また、館内にある数十万点の文芸や歴史史料、あるいは新日本古典籍総合データベースという、高精度画像や書誌データなどを検索するための仕組みを用いて様々な共同研究を行なっています。新型コロナウイルスの影響を受けて四月からは閉鎖していました。

国文研の資料を見ると、過去の書物には、社会が天災に遭遇したときに、その中でお互いにどう守り、コミュニティをどう再生したかという経験が多く記録されていることに気付かされました。

感染症についての文献も多く残されています。戯作者の式亭三馬には、享和三年(一八〇三)に江戸を襲ったはしかを描写した『麻疹戯言』という小説があります。そこでは「うめきながら、彼らが飲むもの、食べるもの、まるで味がしない。ひとりぼっちで体調が回復するまで一二日間を、指を折って布団の中で待つ以外ないのである」とあります。当時、感染症は二〇〜二五年に一度、人生で二、三回は経験するものでした。感染症の怖さを肌感覚で知っていて、どう体作りをするか、どうエイゼイ状態を保つか。人々は出版物や講談などを通じて情報共有していたのです。文政七年(一八二四)に再流行した際の『麻疹瘡語』には、芝居も遊郭も営業停止にした江戸の様子や、客が来ず生活できないという人々の嘆きが書かれています。二〇〇年前の日本人が、驚くほど今と似た状況に直面していたことがわかります。

安政五年（一八五八）のコレラ流行について書かれている『安政午秋／頃痢流行記』には、夫が体調を崩して働けなくなり、無理をした妻が先に亡くなるという話があります。困窮しているところを町内の人が見かねて葬式の費用を出すけれど、妻は残した夫が心配だと亡霊となって夜な夜な出てくるのです。ある種の奇談ですが、人はひとりでは生きていけないということが示唆されています。当時から、感染症は社会全体で乗り越えないといけないという認識でした。古典は、共同の経験知の集積であって、その意味では、私たちに<sup>4</sup>とって大事な資源なのです。

また江戸時代の後期、天保年間（一八三一～四五年）には、大雨による洪水や冷害によって、全国的な飢饉が起きます。いわゆる「天保の大飢饉」ですが、その時に出版された『豊年教種』という書物があります（天保四年（一八三三）刊）。この中に、当時の人々がお互いに助けあう時の心がけについて記述された箇所があります。お米のある人がお米を持ち寄って、ない人に向けての炊き出しをする。困窮している人をどのように助けたらよいか。「飢えたる人に粥を施すには尤も<sup>5</sup>恭しく謹みて与へよ。必ず必ず不遜にして人を恥づかしむべからず」とあります。その人が困っているのは天災だからであって、自分のせいではない。明日はあなたが困窮するかもしれないのだから、という意味のことが書かれています。

「隠徳あれば陽報あり」という言葉があるように、人に施しを与える、誰かを助けたりすることは、周りの評価などを期待しないで、淡々とシェアしなさいという文化が、江戸時代にはあるわけです。それは今でも日本の文化に生きています。自分の名前を出して、これだけのことをしていると主張するような人については、恥づかしいというか、悪目立ちしているのではないか、といったプレッシャーがかかる。でも、逆に、今はそこは変えていくべきではないかと考えます。

東日本大震災以降、あるいはその少し前から、日本でもボランティアの文化が広がり、浸透しました。実際に多くの若い人たちが、被災地に入り込んで活動されました。現地に赴くことも重要ですが、現地に行けなくてもできることは沢山あります。「このプロジェクトを信じるから自分は寄付をしたけれども、あなたもどうですか」というように、もっと気軽に、お互いに呼びかけ合えるような状況が作り出せないか。寄付をすることで自分を拡張する、自分を新しく何かにコネクトしていく、そういう意識が大切ではないでしょうか。今回のコロナ禍を通して、<sup>6</sup>新しい感覚を育てることができるよう気がしています。そのための一歩として、寄付やボランティアは特別なことだし、ちょっと違う、恥づかしいなと思う気持ちを無くしていきたいです。

大規模災害など非常時のさなかや直後には、一時的に連帯感や高揚感が高まってモラルも向上し、今後の社会をより良くしようという意欲が湧くとされています。新型コロナが終息したとき、私たちは社会に何を残せるでしょうか。パンデミックの状況にある今から手を着けておかないと、喉元を過ぎれば熱さを忘れてしまう。社会のどこをどう良くしたいと感じたのか。不便や不安を極めた状況で、どんな種を見いだして意識や制度を変えていくのか。尊い命が失われ、経済的にも大変な価値が損なわれました。人々の努力に応え、喪失感を埋めるためにも、一つでも二つでも変えるきっかけが生まれれば良いと思います。

いま私たちは、<sup>7</sup>ソーシャル・ディスタンス（社会的距離）を保ちながら連帯感を築くという二律背反に直面しています。子供に朝食を食べさせ登校させられない一人親世帯、手を挙げて「困った」と言いづらい人たちがいます。普段から声を出すといじめられる、浮いてしまうと感じている人たち、社会文化資本にアクセスできないような立場の人は、現在のような状況では、適切なタイミングで声を挙げないと命にかかります。

<sup>8</sup>ひとりになってしまつて話ができる相手がいない状況が、一番の弱者ではないでしょうか。自分が悪いわけではないので、頑張っているのだけでも、なかなかその状況から抜け出すことができない。困つてしまうと、どうしても自分というものを閉ざしてしまう傾向に、私たちはあるんですね。でも、そこはぜひ聞く耳を持つ相手を探して欲しいですし、私たち一人ひとりが、明日は誰かを助けられるかもしれない、そういう自分になりたいという気持ちを持つこと、持てる環境をもっと整えていくべきではないでしょうか。

隣で感染が広がれば、自分にとつてもリスクです。一緒に立ち向かっていかないと、新型コロナウイルスには勝てない。数日姿を見ない人、一人暮らしのお年寄りなどに声をかけていくことが大切だと思います。

新しい生活様式は、私たちの感性を変え、日々の行動パターンも変えていくでしょう。らせん階段を上るようにして、私たちは色んな角度から新たな景色を迎えるはず。社会の変化をくみ取り、新たなビジネスを世界に打ち出すチャンスかもしれません。若い人にはアイデアがあるし、わたくしの知る限り、もう考え始めている人もいます。

<sup>9</sup>ソーシャル・ディスタンスは、今はまだ物理的な距離として考えられていますが、社会の中の自分自身の位置づけを知る、自分の居場所から他者との関係を見つめ直すことだとも捉えたい。一人ひとりの資質、意欲によって、自律的に能力をハツキ

できる社会をいかに整備できるか、そこが問われています。女性の活躍かつやくの場を広げる、様々なセクシュアリティのあり方を認め合う、今後が増えると思われる外国人と共存していくなど、課題は山積しているように見えますが、一方でこの半年間に味わった経験の中には、大きなチャンスが芽を出そうとしているように思います。

それぞれが、その人に合った適切なソーシャル・ディスタンスを保持しつつ、他者の喜びや痛みをフェイクではなく確かな事実として理解するような連帯感に溢あふれた社会、そういう未来を是非迎むかえたいものです。

(村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる——私たちの提言』より ロバート・キャンベル「ウィズ」から捉える世界」 岩波新書)

⑩ コネクト＝接続すること。

#### 〔設問〕

問一 〰〰〰線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1「言葉の壁」とあるが、それによってどのようなことが起きているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新型コロナに感染してしまった人々が差別を受けている。

イ 人々が国境を越えて行き来することを制限されている。

ウ 話す言語が違う人とのコミュニケーションが妨げられている。

エ 国籍や文化などが異なる人どうしの間に分裂が生じている。

問三 ——線部 2「ところがそういった達成を日本の政治家は『民度』の違いという一言に集約してみせました」について、筆者はこの行為に問題があると考えているようだが、それはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今後の感染対策について十分に言葉にする努力をおこたり、感染拡大に苦しむ人たちに向けて連帯を示そうとしなかったから。

イ 感染拡大を防いだという達成を世界各地の人々に対して曖昧な言葉で説明し、その達成の要因を検証し共有しようとしなかったから。

ウ 十分な検証がないままに、感染を抑えることができた要因について他の国に住む人たちを下に見るような言葉で説明しようとしたから。

エ 自国がとった感染防止対策が有効だったことを示すために、コロナに感染してしまった人たちを差別するような言葉を使ったから。

問四 ——線部 3「良い方向に向かおうとする変化」とあるが、それはどのようなことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 欧米先進国の人々も日本の人々と同じく「弱さ」を抱えていることを知ると、皆が団結して感染症に立ち向かうことにつながるような、遠方の人々とも密接な関係を築きたいという思いが生まれたこと。

イ 誰もが等しく「弱さ」を抱えながら自分や家族を守っているのだと想像すると、皆で手を取り合って生きたいと考えるきっかけになり得るような、関わりのない人をも大切に思う気持ちが芽生えたこと。

ウ 在宅勤務が続くことで長い時間他者と向き合っていると、人々の心の「弱さ」を補っていける社会制度のあり方について考える機会になるような、あらゆる他者をおしく感じる瞬間があったこと。

エ 人種や性別などに関わらず誰しもウイルスの感染を恐れていることを思うと、あらゆる差別をなくす運動へと自分を駆り立てるような、皆同じ「弱さ」を抱えた仲間なのだという認識が生まれたこと。

問五 —— 線部 4 「私たちににとって大事な資源なのです」とあるが、なぜ古典は「大事な資源」なのか。次の中から適當なものの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 古典に描かれる過去の人々の知恵は、現在においても役に立つものだから。
- イ 古典になるような古い作品は、それだけで歴史的価値を持つものだから。
- ウ 古典に登場する人物はみな、人はひとりでは生きていけないことを示すから。
- エ 古典になっている作品の中には、過去の人々の成功例が書かれているから。

問六 —— 線部 5 「今はそこは変えていくべきではないかと考えます」とあるが、どのような考え方を考えるべきだと言っているのか。次の中から適當なもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 困っている人を見たら、次は自分が同じ立場になると考える。
- イ 人助けをする時には、周りの人がどう評価するかは気にしない。
- ウ 天災で苦しい思いをしている人に、その苦しみの責任はない。
- エ 他人に施しを与えることは、目立たないように行うべきである。

問七 —— 線部 6 「新しい感覚」とあるが、それはどのような感覚か。次の中から適當なもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア ボランティアや寄付を通じて自分の世界を広げたり他者とのつながりを作ったりするような感覚。
- イ ボランティアや寄付を互いに誘い合って行うことで新しい関係や連帯感を生み出すような感覚。
- ウ ボランティアや寄付を広めることで社会をより良くするための一歩を踏み出そうとするような感覚。
- エ ボランティアや寄付をしている人を特別視しがちな風潮を努めて変えていこうとするような感覚。

問八 —— 線部 7 「ソーシャル・ディスタンス（社会的距離）を保ちながら連帯感を築くという二律背反に直面しています」とあるが、「ソーシャル・ディスタンス（社会的距離）」を保ちつつ、同時に「連帯感を築く」ことが両立しがたいと筆者が述べるのは、どのような考えにもとづいているからだと考えられるか。次の中から適當なもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 一時的に連帯感が高まったとしても、距離をとった状態でそれを維持するのは困難だという考え。
- イ 連帯感を築くことは重要だが、それには心の隔たりを取りのぞく必要があるという考え。
- ウ 人と人が連帯感を築くためには、本来は身体的な距離を近づけた方が良いという考え。
- エ どの程度までならば離れても連帯感を築けるかという感覚は、個人で異なるという考え。

問九 —— 線部 8 「ひとりになってしまつて話ができる相手がない状況が、一番の弱者ではないでしょうか」とあるが、筆者がそのように述べるのはなぜだと考えられるか。次の中から適當なもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身には責任のない問題に直面しているのに、周囲の人にうったえることができず、たった一人で責任を負わされる目にあうから。
- イ 個人の力では解決できない問題に直面しているのに、他人に助けを求めることができず、誰からも救いの手を差し伸べてもらえないから。
- ウ 一人ぐらしの人こそ被害にあいやすい問題に直面しているのに、誰にも相談することができず、深刻な不利益をこうむることになるから。
- エ 周りの人と一緒に取り組むべき問題に直面しているのに、他人の援助を得ることができず、社会の中での役割を失ってしまうから。

問十 次の会話文の空らんに入る言葉を、本文を参考にしながら三〇字以上、四〇字以内で答えなさい。

A これから世界はどうなっていくてしまうのかな。新型コロナはいつ終息するか分からない。たくさんの人が亡くなってしまうし、経済的な損失もはかりしれないよ。

B うん。

A コロナの流行が原因で倒産とうさんしてしまった会社もある。うちの会社も業績が悪化してきているわけで、この先どうなっていくのか不安だよ。

B 確かに。うちの会社もこのままでは危ないかもしれないね。でも、「  
」とも考えられないかな。

A そんなにうまくいくかなあ。

B もちろんそんな簡単な話じゃないけれど、発想を転換てんかしてがんばってみるしかないよ。

A 発想の転換か……。まあ、そうだね。がんばってみようか。

問十一 — 線部9「ソーシャル・ディスタンスは——他者との関係を見つめ直すことだとも捉えたい」とあるが、筆者がどのように述べるのはなぜだと考えられるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

A 新型コロナが流行し他者との交流が減ってしまった現状を、これまでつながりのなかった人々と連帯するために活用することが、孤立して困っている人を救えるような社会を実現するために役立つから。

I 人々が互いに離れて過ごさなければならぬ非常時の生活様式を、人と人との精神的な距離を可能な限り近づけていくための土台と捉えることが、連帯感にあふれた社会を築くためには必要だから。

ウ 他者とあまり接近できない新しい生活のあり方を、他者とのつながり方について考え直すためのきっかけとして意識することが、多様な人々が連帯する社会に近づくための道を探ることにつながるから。

E 新型コロナという感染症によって人と人とが隔てられたこの状況を、自分の感性や考え方についての理解を深める機会と考えることが、人々が互いに連帯し尊重しあう社会をつくるための一歩になるから。





二〇二二年度 帰国生入試 国語解答用紙 (1)

受験番号

--	--

氏名

--

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

	解答用紙2
--	-------

合計

--

問一

互
い
が
そ
れ
ぞ
れ
集
中
し
、
自
分
の
練
習
を
す
る

問二

エ
---

問三

ア
---

問四

イ
---

問五

イ
---

問六

ウ
---

問七

エ
---

問八

ウ
---

問九

ア
---

問 十				
続	う	の	父	た
け	か	次女	を	と
て	は	に	追	え
い	問	景	い	越
れ	題	響	か	え
ば	に	を	け	ら
い	せ	受	て	れ
い	ず	け	ギ	な
の		て	夕	く
だ	懂		一	て
と	れ	夏	の	も
思	の	佳	練	
う	選	も	習	懂
よ	手	追	を	れ
う	を	い	練	の
に	追	っ	り	存
な	っ	け	返	在
っ	て	る	す	び
た	泳	か	十	あ
。〇	ぎ	ど	太	る

受験番号

氏名

小計

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

問 一	
d	a
暮 らし	厳 しく
e	b
発 揮	多 角 的
	c
	衛 生

問二
エ

問三
ウ

問四
イ

問五
ア

問六
エ

問七
ア

問八
ウ

問九
イ

問 十	
ヒ	人
ジ	々
ネ	の
ス	生
を	活
打	様
ち	式
出	が
す	変
子	わ
ヤ	っ
ン	た
ス	か
だ	ら
	こ
	そ
	、
	新
	し
	い

問十
ウ